

小・中英語教育の接続と連携の試み —小・中学校で活用できる共通教材の試作と試用—

西垣 知佳子¹ 山下 美峰² 高橋 直美³ 田村 敦⁴

¹千葉大学教育学部 〒263-8522 千葉県千葉市稲毛区弥生町 1-33

²浦安市立浦安中学校 〒279-0003 千葉県浦安市海楽 2-36-1

³大網白里市立大網中学校 〒299-3242 千葉県大網白里市金谷郷 275

⁴浦安市立舞浜小学校 〒279-0031 千葉県浦安市舞浜 2-1-1

E-mail: ¹gaki@faculty.chiba-u.jp, ²yamashita.miho@city.urayasu.lg.jp

³naomita@pearl.ocn.ne.jp, ⁴tamura.atsushi@city.urayasu.lg.jp

概要 新学習指導要領のもと、必履修の領域として「外国語活動」が導入され、以前にもまして英語教育の小中連携が強く望まれるようになった。本研究では「聞く」活動に重きを置きながら、小学生から中学生まで学年や英語力のレベルに合わせて継続して活用できる教材を目指して小・中英語共通教材を作成した。教材は「浦安ふるさとカルタ」「都道府県カルタ」と名付けた。小学5、6年生と中学1年生に試用実践を行い共通教材の利用をとおして小・中の接続が可能かどうかを検証した。プリ・ポストテストと質問紙調査を使って試用効果を検証したところ、技能と態度の両面において効果が確認された。試用実践の結果、開発した教材が異なる学年で利用できること、共通教材を利用して小中連携が可能であることが示唆された。今回の成果を踏まえて、本教材をさらに充実させたいと考える。

Links and Connections in English Education between Elementary School and Junior High School Using Common Material

Chikako Nishigaki¹ Mihou Yamashiata²

Naomi Takahashi³ and Tamura Atushi⁴

¹ Faculty of Education, Chiba University 1-33 Yayoi-cho, Inage-ku, Chiba-shi, Chiba 263-8522 Japan

² Urayasu Junior High School 2-36-1 Kairaku, Urayasu-shi, Chiba 279-0003 Japan

³ Oami Junior High School 275 Kanayago, Oamishirasato, Chiba 299-3242 Japan

⁴ Maihama Elementary School 2-1-1 Maiham, Urayasu-shi, Chiba 279-0031 Japan

With the start of “Foreign Language Activities” at elementary school, links and connections in English education between elementary school and junior high school are strongly needed. In this study, we adapted ‘karuta,’ a traditional Japanese card game, for English classes, and developed English learning material by using it. The developed materials are called *Hometown Karuta* and *Prefectural Karuta*. They can be used in classes repeatedly in a variety of different

ways from elementary school to junior high school to improve students' English listening ability. The developed 'karuta' materials were used for 5th and 6th graders of elementary school, and 7th graders of junior high school. As a result of this instruction, the improvements between the pre- and post-tests were statistically significant. The results of questionnaires also revealed that students had enjoyed the 'karuta' activities. Thus, we concluded that the developed 'karuta' materials could be applied in English classes to connect the English instruction between elementary school and junior high school

1. はじめに

2008年告示の現行の学習指導要領では、全児童が必ず履修しなければならない必履修の領域として、小学校に初めて「外国語活動」が導入された。それに対して文部科学省教科調査官の直山（2013）^[1]は「小学校における新学習指導要領の全面実施から3年目の今、外国語活動における大きな課題の一つは、やはり「小中連携」です」（p.14）と述べている。また直山（2011）^[2]は、一般に小中連携には情報交換、交流、カリキュラムの連携などの形があるが、カリキュラムの連携を具体化するひとつの方法に、小中共同教材の活用があると述べている。

一方、「ベネッセ第2回小学校英語に関する基本調査」（ベネッセ教育総合研究所，2010）^[3]によると、小学校英語で「とくに課題だと感じていることはなんですか」という質問に対して、教務主任（2,374名）が3つまで選択して回答した結果では、「教材の開発や準備のための時間（59.0%）」が第1位であり、小学校英語では、教材の整備が問題となっている実情がうかがえる。このことから小中共同で使える教材があれば、教育現場の課題への対応策にもなるであろうと考えられる。

以上の状況を踏まえ、本研究は、1) 小学校と中学校の英語授業で活用できる共通教材を作成する、2) 作成した教材を実際に使って小中学校で試用実践を行う、3) 実践の効果を検証し、作成教材が小中の接続・連携に活用できるかどうかを検証することを目的として行われた。

2. 教材作成

2.1 教材作成の留意点

次の観点を満たすことを目指して作成した。

1) 「聞く」ことを重視する。

- 2) 「話す」「読む」「書く」活動へと発展させられる教材とする。
- 3) 学習者の英語に対する情意フィルター (affective filter) を下げるような、楽しく学べる教材とする。
- 4) 学習者の知的関心に沿うような教材とする。

教材作成は What と How の観点から考える必要がある。上記の留意点を実現するために、What と How の観点から実際にどのような工夫を施して教材を作成したか、その手順について以下で報告する。

2.2 How: どうやって教えるか

言語習得はリスニングから始まることから、言語習得の最初のステップでは音声インプットは不可欠である (Dunkel, 1986; 樋口, 2010; Krashen & Terrell, 1983) ^{[4] [5] [6]}。そのため外国語活動には、音声中心で進められる指導方法と教材開発が必要であると言われる (岡・金森, 2012) ^[7]。そこで、How には、「聞く」ことを重視しながら楽しく活動できる「カルタ」の方法を採用した。カルタの「絵札」と「読札」を組み合わせて利用すると、「話す」「読む」「書く」活動へと発展させることができるので (西垣・中條・オヒガン, 2013) ^[8]、中学校ではカルタを4技能の統合的な指導に活用できる。さらにカルタは、その他の様々な理由からも教育現場での利用価値は高い。以下にカルタの利点を4つの観点からまとめる。

(1) 言語習得の観点

- ◎遊びをとおして自然に英語と触れる。
- ◎ゲームに参加するために積極的に聞いて理解しようとする。
- ◎理解したことを札を取る等の行動で示す。
- ◎絵札があるので、日本語を介さずに学習語の

意味を理解できる。

(2) 心理的な観点

- ◎楽しい活動である。
- ◎話すことが強要されないので英語を話したがない生徒も安心して参加できる。
- ◎ルールが単純である。

(3) 教育的な観点

- ◎正しく理解できたかどうかその場で即座に確認できる。
- ◎絵札と読札を併せて活用すると、4 技能を統合的に育成することができる。
- ◎絵札と読札を使うと多様な遊び方があり、学習方法を変えて、繰り返し活用できる。

(4) 実用性の観点

- ◎軽くて持ち運びが便利である。
- ◎保管しやすい。
- ◎使い方が容易である。

2.3 What : 何を教えるか

バトラー (2005) ^[9]は、外国語活動の英語教授法を考える上で「学習者の認知発達レベルと英語レベルのギャップ」に考慮する必要があると指摘している。すなわち児童の英語力に合わせると、教材は買い物ゲーム、自分の好きな T シャツづくり等、内容が幼稚になりがちである。そこで、児童の認知レベルに沿った教材づくりを目指し、What には教科横断的な内容を扱うこととした。その結果、ひとつ目の教材として、児童が住む千葉県浦安市が推進する「ふるさと教育」と関連させて、「浦安ふるさとカルタ」を作成した。作成の際には、浦安市の児童が小学 3、4 年生で学ぶ副読本等を参考にした。そして二つ目の教材には、小学 5、6 年生の社会科の教科書等を参考にして「都道府県カルタ」を作成した。これらの教材をとおして児童が身近な語彙を身につけ、自己表現力を高めることに役立てたいと考えた。

2.4 絵札と読札

「浦安ふるさとカルタ」と「都道府県カルタ」には絵札と読札がある。「浦安ふるさとカルタ」の読札には、スリーヒントゲームで使えるヒント文を、英文の難易度を変えて 10 個～20 個作成した。例えば、海に接する浦安市は、以前は漁師町であった。そのため「アサリ飯」が名物であるので、学習語のひとつとした。「アサリ飯」にたいして、「I'm a food.」「I'm hot.」「I'm delicious.」という簡単なヒントから、「You add soy sauce a bit when you cook me.」という難しいヒントまで作成

して日本語訳とともに読札に載せた (図 1)。

「都道府県カルタ」では絵札に各都道府県の観光地、特産物、お土産、楽しめる場所に関する 4 枚の写真を載せた。読札にはその写真を説明するヒント文 4 つと、その県の際立った特徴に言及したヒント 1 つの計 5 つのヒント文を入れた (図 2)。

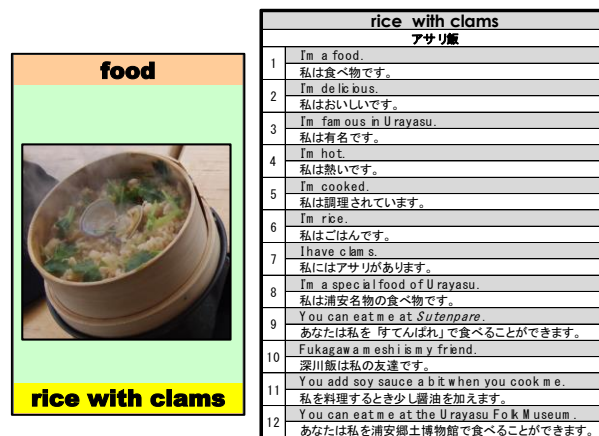


図 1 「浦安ふるさとカルタ」の例



図 2 「都道府県カルタ」の例

「浦安ふるさとカルタ」と「都道府県カルタ」で扱う英語は、小・中学生の語彙知識を超えたレベルになるが、社会科で得た背景知識によって理解が助けられるため、教材の難易度を下げることができる。また他教科の学習内容を英語をとおして学び直したり、知識を深めたりすることができる。「浦安ふるさとカルタ」と「都道府県カルタ」の両者を併せて使用することで、「ふるさと」から「日本」へと思考を広げて英語を学ぶという使い方もできる。

2.5 カルタを使った指導

小・中学校をとおしたカルタの継続的利用に関する構想を図 3 に示した。本教材では、5 年間をとおして音声指導を大切にすると同時に、小学校

ではアクティビティをとおして学習語に触れて（導入）、聞いてわかって（理解）、言えるようにする（定着）。さらに絵札に掲載した綴りを利用して、文字への関心を高め、文字指導への移行を目指す（接続）。

中学校の入門期では、絵札のアルファベットを読んだり書いたりして音と文字の関係に気づかせる。その後は文法項目の導入や英語構文の定着に利用する。例えば“go to..”の定着では“I go to the folk museum.” “I go to Tokyo Disneyland.”のように絵札を使って表現のドリル練習を行う。上級学年では絵札を見て、不定詞や関係代名詞等のターゲット構文の練習を行う。また、口頭、あるいは書いて自由にヒント文を作ったり、絵札を見て picture description をしたりする（産出）。読札を生徒が読んでカルタをすれば読む活動となる。このように絵札と読札を用いると、4技能を使う多様な活動を行えるので繰り返し利用ができる。

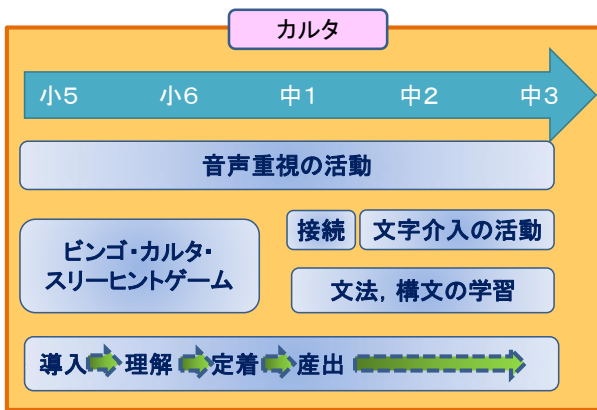


図3 カルタ使った小中連携

3. 作成した教材の試用実践と結果

本節では、図3の構想のもとに作成したカルタを使って試用実践を行った結果について報告する。「浦安ふるさとカルタ」は、小学校と中学校で試用し、異なる学年の学習者が同一の教材を使って学習した。「都道府県カルタ」では小学生のときに「都道府県カルタ」を学習した中学1年生が、中学校で再び「都道府県カルタ」を使って学習した。

3.1 実践1：「浦安ふるさとカルタ」の小学校での活用

3.1.1 実践の方法

- (1) 学習者：千葉県浦安市A小学校5年生(31名)
千葉県浦安市B小学校6年生(36名)

- (2) 指導者：学級担任が授業を主導し、ALTが補助した
- (3) 学習語：toasted seaweed（焼き海苔）、three-shrine joint festival（三社祭り）、fish market（魚市場）、sports park（運動公園）、Tokyo Disneyland（東京ディズニーランド）等の18語を指導した。一人に1セットの絵札(18枚)を配布して活動した。
- (4) 活動：授業の冒頭の約15分を使って5回授業を行った。1回の授業では、ビンゴ、カルタ、スリーヒントゲーム、カードリレー等、異なる2~3種類の活動を行った。
- (5) 評価：
 - ① 事前・事後テスト
(事前・事後で同一テストを使用)
 - a. リスニングテスト(20題)
 - b. 綴りの認識テスト(10題)
 - ② 質問紙調査
 - a. リッカート尺度(5件法)
 - b. 自由筆記

リスニングテスト(20題)には問1と問2があり、それぞれに小問が10題ずつあった。問1では“The folk museum is a good place to learn about Urayasu.”のように、学習語が含まれる英文が流れてくるので、選択肢の中から学習語に対応する日本語を選んだ。問2では、3つの英文ヒントを聞いて、ヒントが示すものを選択肢から選んだ。綴りの認識テストでは、“shrine”と聞いて、その綴りを選択肢から選んだ。絵札には綴りを掲載したが、授業では文字の学習をしたり、綴りに注意を向けさせる指示はいっさい与えなかった。綴りを絵札に載せて、自然と綴りに触れる環境を創り出すことで、綴りの認識力が高まるかどうかを検証した。

なお、全ての音声は、授業者とは異なるネイティブスピーカーに依頼してCDに録音して使用した。

リスニングテスト問1

英語を聞いて、英語の中にでてくるものに○をつけましょう。(10題)

例 You can see houseboats on the Edo River.

あさり飯	鉄鋼団地	英語	魚市場	わから ない
屋形船	郷土博物館	焼きノリ	ピアノ	
揚げ煎餅	焼きハマグリ	三社祭り		
サンドイッチ	運動公園			

リスニングテスト問 2

3つのヒントを聞いて、それが示すものに○をつけてください。(10題)

例 I'm famous. Children like me. I have a big castle.

鉄鋼団地	あさり飯	魚市場	ピアノ	わからない
東京ディズニーランド	屋形船	スイカ		
焼きフリ	揚げ煎餅	運動公園		
郷土博物館	焼きハマグリ	三社祭り		

綴りの認識テスト

英語を聞いて、その単語に○をつけてください。(10題)

例 shrine

market	rice	dance	tideland	わからない
house	steel	boat	orange	
shrine	seaweed	festival		
museum	clam	cracker	station	

3.1.2 結果と考察

リスニングテストの結果を表1に示した。5年生で42.8点、6年生で46.0点の得点上昇があり、いずれも有意な上昇で、効果量は大(水本・竹内, 2010)^[10]であった($t(30)=15.00, p=.00, \Delta=3.06, t(35)=14.32, p=.00, \Delta=4.34$)。リスニングテストに向上が見られたことから、「浦安ふるさとカルタ」は、外国語活動のリスニング指導に有効に利用できることが確認できた。

表1 リスニングテストの結果(単位%)

学年	項目	事前	事後	上昇	p
A小5年 (31名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	23.2 (14.0)	66.0 (17.8)	42.8	.00
B小6年 (36名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	21.8 (10.6)	67.8 (21.4)	46.0	.00

綴りの認識テスト(表2)では5年生で18.2点、6年生で16.4点の得点上昇が見られ、統計的に有意な差であった($t(30)=5.50, p=.00, \Delta=.53, t(35)=5.02, p=.00, \Delta=1.17$)。小5の効果量は中程度、小6の効果量は大であった。授業中に教師が児童の意識を文字に向けさせることはなかったが、絵札に書かれた文字を自発的に読んでいる児童が多いこと、綴りを目にすることで学習語を文字で確認し、その認識力が伸びたことがその理由と考えられる。活動の中で自然と文字を目にする環境があると、その後の文字学習の準備となることが期待できる。また、6年生が5年生よりも効果量が大きかったことは、6年生のほうが5年生よりも文字学習に対するレディネスが高いことを示唆しているとも考えられる。この点は、引き

続き調査を行いたい。

表2 綴りの認識のテスト結果(単位%)

学年	項目	事前	事後	上昇	p
A小5年 (31名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	50.9 (34.7)	69.1 (35.1)	18.2	.00
B小6年 (36名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	55.8 (14.0)	72.2 (17.8)	16.4	.00

3.2 実践2:「浦安ふるさとカルタ」の中学校での活用

3.2.1 実践の方法

- 学習者:千葉県浦安市C中学校1年生(2クラス 67名)
- 指導者:英語教師とALT(英語教師が中心となって活動しALTは補助的に支援した)
- 学習語:小学校と同じ18語
- 活動:授業の冒頭の約15分を使って5回授業を行った。ビンゴ、カルタ、スリーヒントゲーム等の小学校と同じ活動を行って、アルファベットと単語の読み・書きの指導をした。
- 評価:

①事前・事後テスト:アルファベットの綴り(事前・事後で同一テストを使用)

問1(23題)英語を聞いて文字を書き、次に来る文字を推測して()に書きましょう。

例 音声 G, H, I, J, K, L ()

解答用紙 _ _ _ _ _ ()

問2(5題)名前を聞いて書き取りましょう。

例 McDonald, Write capital M, c, capital D, o, n, a, l, and d.

②質問紙調査 小学校と同じ質問紙を使った。

3.2.2 結果と考察

表3 アルファベットのテスト結果(単位%)

学習者	項目	事前	事後	上昇	p
C中1年 ア組(33名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	69.5 (26.0)	80.6 (21.9)	11.1	.00
C中1年 イ組(34名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	61.3 (24.5)	77.2 (22.3)	15.9	.00

テストの結果を表3に示した。ア組は11.1点、イ組は15.9点の得点上昇があり、統計的に有意な差で、効果量の中程度であった($t(32)=4.28, p=.00, \Delta=.43; t(33)=6.70, p=.00, \Delta=.48$)。このことから「浦安ふるさとカルタ」が中学1年生の入門期のアルファベットの指導に有効に活用できることが確認できた。

3.3 実践3：「都道府県カルタ」を使った指導

3.3.1 実践の方法

- (1) 学習者：千葉県大網白里市D中学校1年生
(2クラス 52名)
この学習者は、小学校6年生のときに都道府県カルタを使って学習した生徒で、中学校1年生になって再び同じカルタで学習した。
- (2) 指導者：英語教師とALT（英語教師が中心となって活動を行い、ALTは補助的に支援した）
- (3) 活動：1学期に9回、2学期に10回、授業の最初あるいは最後の約10～15分を使って指導した。
- ①1学期 音と文字の関係の指導
②2学期 英語で文を書く指導。
自分たちでヒント文を作ってスリーヒントゲームを行った
- (4) 評価：
① 事前・事後テスト（同一テストを使用）
1学期 Q1（10題）英語を聞いて単語の綴りを完成させてください。例 “Book!” → ___ook
2学期 Q1（6題）英文を読んで意味を書いてください。例 We grow many strawberries.
Q2（6題）都道府県を紹介する英文を3文ずつ書いてください。
- ②質問紙調査
a. リッカート尺度（4件法）
b. 自由筆記

3.3.2 結果と考察

1学期の指導と2学期の指導に分けてそれぞれテストの結果を表4、表5に示した。表4を見るとウ組で22.0点、エ組で23.4点の上昇があり、いずれも統計的に有意な上昇で、効果量は大であった（ $t(25)=7.58, p=.00, \Delta=1.14$; $t(25)=7.51, p=.00, \Delta=1.06$ ）。

表4 音と文字の関係のテスト結果（単位%）

学習者	項目	事前	事後	上昇	<i>p</i>
D中1年 ウ組(26名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	32.9 (19.4)	54.9 (23.1)	22.0	.00
D中1年 エ組(26名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	37.1 (22.1)	60.5 (26.2)	23.4	.00

表5では、ウ組で34.4点、エ組で38.8点の上昇があり、統計的に有意な上昇で、効果量は大であった（ $t(27)=7.43, p=.00, \Delta=1.32$; $t(23)=7.03, p=.00, \Delta=1.65$ ）。このことから「都道府県カルタ」

は、中学1年生の入門期の指導や文を書く指導に効果があり、小中連携に利用できることが確認できた。

表5 文の理解と作文のテスト結果（単位%）

学習者	項目	事前	事後	上昇	<i>p</i>
D中1年 ウ組(28名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	33.0 (26.1)	67.4 (32.5)	34.4	.00
D中1年 エ組(24名)	<i>M</i> (<i>SD</i>)	20.1 (23.5)	58.9 (28.2)	38.8	.00

3.4 質問紙を使った調査

各実践では質問紙調査を併せて行った。調査結果を「浦安ふるさとカルタ」と「都道府県カルタ」に分けて示した。

3.4.1 浦安ふるさとカルタ

表6と表7から、ふるさとを扱った内容、カルタを使った学習方法が好意的に受け入れられていたことがわかる。作成したカルタが異なる学年で繰り返し学習に利用できる可能性が示唆されたと考える。

表6 浦安ふるさとカルタ質問紙調査の結果：カルタについて（5件法）

質 問	5年	6年	中1
見た目がきれいだった	4.0	4.2	4.5
文字は見やすかった	4.4	4.5	4.4
写真があって単語の意味が理解できた	4.5	4.5	4.6
写真があって単語が覚えやすかった	4.3	4.6	4.1
カルタの大きさはちょうど良かった	4.1	4.4	4.3

表7 浦安ふるさとカルタ質問紙調査の結果：内容について（5件法）

質 問	5年	6年	中1
浦安のことを英語で勉強できてよかった	4.1	4.3	4.3
浦安カルタに親しみが持てた	3.7	4.1	3.9
浦安カルタを使った勉強は面白かった	4.4	4.6	4.1
ゲーム形式で楽しく英語を学習できた	4.5	4.7	4.6

3.4.2 都道府県カルタ

「都道府県カルタ」で学んだ学習者は小学校6年生のときに同じ教材を使って外国語活動を経験している。表8から中学校1年生で再び馴染みのある教材で学習したことに対して、安心したと感じていることがわかる。このことから共通教材の利用で、安心感が得られていたと考える。カルタを共通教材として継続的に使えることが確認できた。

表8 1学期のカルタに関する調査(4件法)

質 問	中1
馴染みのあるカルタを使って安心した	3.1
絵札のウラに綴りがあってやる気が出た	3.3
小学校よりも文字が読めるようになった	3.4
もっと英語を読めるようになりたい	3.4

表9 2学期のカルタに関する調査(4件法)

質 問	中1
都道府県カルタで楽しく学べた	3.4
読札はヒントを作るときに役だった	3.6
スリーヒントクイズは面白かった	3.4
もっとカルタを使って勉強したい	3.4

4. まとめと展望

小中の英語教育で共通教材として活用することを目指してカルタ教材を作成し、小中学校で試用実践を行った。異なる学年で、異なる方法でカルタ教材を使って指導した結果、リスニング、アルファベット、文字と音の結びつき、文を書く等の指導に、カルタ教材を活用できることが確認できた。また、共通教材をとおして、小学校と中学校の英語学習を接続することが可能であることも示唆された。なお、本稿では報告していないが、筆者らは同一のカルタ教材を使って中学2,3年生、高校生を指導した試用実践も行っており、ひとつの教材を小学校から高校まで繰り返し使うことの可能性についても調査している。

さらに「浦安ふるさとカルタ」は地域に根差した教材であることから、地域の研修会等で教材と活動例を紹介したり、新しい利用の方法を参加者が考察したりしている。参加した教員からは「市外から来たのでカルタを使って地域のことがわかっていい」「授業で使ってみよう」等の反応を得ている。

今後は、「浦安ふるさとカルタ」については、扱う学習語彙やヒント文を増やし、ふるさとに関する知識をさらに深められるような教材にした

い。「都道府県カルタ」については、絵札の情報について検討をして精選したり、拡大したりしたい。また、読札のヒント文は、初級用と上級用に分けて作成する等して、さらに教師が使い易い教材にしたい。加えて、両教材の普及を目指して実践を拡大し、広く紹介していきたい。

引用文献

- [1] 直山木綿子, 「スムーズな連携を築くための小中連携のあり方」『STEP』, 2013 12月号・2014 1月号, pp.14-15, 2013.
- [2] 直山木綿子, 「外国語教育における小中連携」『小中連携 Q&A と実践』, 萬谷隆一, 直山木綿子, 卯城祐司, 石塚博則, 中村香恵子, 中村典生(編著), pp.6-7, 開隆堂, 2011.
- [3] ベネッセ教育総合研究所, 「第2回 小学校英語に関する基本調査(教員調査)」, 2010.
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/syo_eigo/2010/index.html
- [4] Dunkel, P., Developing Listening Fluency in L2: Theoretical Principles and Pedagogical Considerations, *The Modern Language Journal*. 70(ii). pp. 99-106, 1986.
- [5] 樋口忠彦(代表), 『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言』, 研究社, 2010.
- [6] Krushen, S. & Terrell, T. D, *The Natural Approach: Language Acquisition in the classroom*, Oxford: Pergamon Press, 1983.
- [7] 岡秀夫, 金森強(編著), 『小学校外国語活動の進め方—「ことばの教育」として—』, 成美堂, 2012.
- [8] 西垣知佳子, 中條清美, キャサリン・オヒガン. 『生活語彙が楽しく身につく! 小・中学生の英語カルタ&アクティビティ 30』, 明治図書, 2013.
- [9] バトラー後藤裕子, 『日本の小学校英語を考える アジアの視点からの検証と証言』, 三省堂, 2005.
- [10] 水本 篤, 竹内理, 「効果量と検定力分析入門—統計的検定を正しく使うために—」『より良い外国語教育研究のための方法』, 外国語教育メディア学会(LET) 関西支部 メソドロジ—研究部会 2010 年度報告論集, pp.47-73, 2010.